

英語活動における自分の「知」を創り出す子ども

長野仁志 (CHONO Hitoshi)

鳴門教育大学附属小学校

要約

英語活動におけるコミュニケーションにおいて、子どもたちは自分の表現でも通じるといったある程度の自信をもっている。しかし、伝えたいことがあっても、表現することが困難であると、やりとりをやめてしまうことがある。どうすれば相手にうまく伝わるのか、どうすれば相手の伝えたいことをうまく受け取ることができるのか、伝え方や聞き方を試行錯誤しながら、コミュニケーションを図ろうとする。その際、教師の会話をモデルとしたり、友達の表現のよさを真似たり、コミュニケーションのおもしろさや楽しさに気づき、伝え合うよさを実感したり体得したりして、自分なりに取り込んでいくようになることが肝要である。こうして、創り出したものや、活動のよさを意味付けしてとらえたものを自分の「知」とする。この、自分の「知」を創り出す子どもを育てるための支援について実践報告する。

(キーワード：小学校外国語活動 授業実践)

1. はじめに～英語活動における自分の「知」のとらえ方～

小学校における外国語活動では、コミュニケーション能力の素地を育成することをねらいとする。コミュニケーション能力の素地とは、言語や文化についての体験的な理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、英語の音声や基本的な表現への慣れ親しみの3つを統合したものを指している。英語活動は英語を用いた体験的活動を通して、これら3つの資質や能力を養う領域である。

本校では、(外国語活動を英語活動とする。以下、英語活動と称す) これまでに、コミュニケーション能力の素地の育成をめざし、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成に焦点をあて研究を進めてきた。これから英語による活動を行おうとする段階では、ジェスチャーを用いることや、絵を使って表したり、既知の言葉をもとに表現を工夫したりして、コミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けるようにしていくことが自然であろう。

実際の英語活動におけるコミュニケーションにおいて、子どもたちは自分の話す単

語や簡単な表現でも通じるといったある程度の自信をもっている。しかし、伝えたいことがあっても、表現することが困難であると、やりとりをやめてしまうことがある。

子どもたちは、どうすれば相手にうまく伝わるのか、どうすれば相手の伝えたいことをうまく受け取ることができるのか、伝え方や聞き方を試行錯誤しながら、コミュニケーションを図ろうとする。その際、教師の会話をモデルとしたり、友達の表現のよさを真似たり、コミュニケーションのおもしろさや楽しさに気付き、伝え合うよさを実感したり体得したりして、自分なりに取り込んでいくようになることが肝要である。こうして、創り出したものや、活動のよさを意味付けしてとらえたものを自分の「知」とする。

英語活動における自分の「知」とは、英語を用いたコミュニケーション活動を通して、創り出したもの、及び活動のよさを自分なりに意味付けしてとらえたものと措定し、実践研究を進めることとした。

2. 英語活動で育てたい自分の「知」を創り出す子どもの姿

学習場面での自分の「知」を創り出す子どもの姿を次のア～エにまとめた。

- ア 積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿
- イ 表現を見たり聞いたりして、自分に必要な表現を見つけようとする姿
- ウ コミュニケーションのおもしろさやよさを感じている姿
- エ 見いだした自分なりの表現を使って、コミュニケーションをしている姿

3. 心をつなぐ学びについての考え方

(1) 認め合う人間関係と目的意識に満たされた空間のとらえ方

英語活動で、発音や表現に対する自信のなさや間違いに対する恥ずかしさなどから不安を抱いている子どももいる。その不安を払拭することが必要であると考えられる。そのためには、自分なりの発音や表現で、互いに認め合い楽しく伝え合える雰囲気に含まれていることが必要である。伝えようとする子どもは、何とかして伝えようとする方法を工夫したり、試行錯誤を重ねたりする必要がある。また、聞こうとする子どもは、相手が何を伝えようとしているのか心を傾けて聞こうとすること、繰り返し尋ねようとする態度が必要になってくるであろう。あるいは、誰とでもコミュニケーションを楽しめる仲のよさなど、互いを認め合う人間関係が成り立っている空間が必要である。

目的意識に満たされた空間では、活動のめあてや方法についてよく分かっており、活動が協力的に行われ、互いのよさを学び合える。また、みんなが楽しく英語を使ったコミュニケーションを楽しもうとする空間を大切にしたい。

(2) 共鳴のとらえ方

子どもたちは、コミュニケーションを継続しようと伝え方や聞き方を試行錯誤し、ジェスチャーや知っていることばを組み合わせながら、伝えたり尋ねたりする。また、教室にある掲示物などを手がかりにする。英語を用いるだけでなく、ジェスチャーを用いたり、他の言葉で言い換えたり、既習の言葉を組み合わせることで表現をつくったりし

て、伝えようとする。このような伝え合いの中で、それぞれの表現やコミュニケーション活動のよさを互いに受け入れ、心から共感することを英語活動での共鳴と考える。このような共鳴を繰り返すことにより、自分なりの表現やコミュニケーションのよさに気付き、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成が図られると考える。

4. 研究内容

(1) 自分の「知」を創り出す子どもを育てるために、どのように支援すればよいか

子どもの興味・関心に合った話題や題材のもと、子どもが思わずやってみたく思うような活動を展開することにより、積極的にコミュニケーションを図ろうとするであろう。

また、コミュニケーションを図ろうとするためのヒントやモデルも必要である。教材・教具となるものを掲示したり提示したりすることにより、他の表現方法を試みようとする。さらに、活動をしやすいグループを編成することで、互いにコミュニケーションの方法に対する関心が高まったり、表現のよさに気付いたりする。コミュニケーションを続けられていることや、自分を取り入れた友達の表現や参考になったことを積極的に使って、次のコミュニケーションへの意欲へとつながるようにする。

(2) 心をつなぐ学びのために、どのように支援すればよいか

① 認め合う人間関係と目的意識に満たされた空間づくりのために

誰とでもコミュニケーションを楽しみ、互いが認め合い、楽しく伝え合う英語活動にするために、表現を連想することができる掲示物を用意しておく。また、分からない表現を教師に尋ねたり、音声を聞くことのできる電子辞書を使って発音の仕方を調べたりすることができるようにしておくことにより、発音に対する興味をもってコミュニケーションを継続しやすくする。コミュニケーションにおいて、活動のよさを認めたりほめたりすることばがけやコミュニケーションを図ることのよさや大切さにかかわる気付きを意図的に取り上げ、価値付けることにより、学級全体で共有できるようにする。

子ども同士が目的意識をもち積極的にかかわることのできる空間づくりとして、子どもが思わず聞いてみたい、自分も思いを伝えたいと思う共通の目標や活動を設定することである。例えば、「留学生と交流しよう」といった、子どもたちの意欲を高めるような活動の目標を設定し、見通しをもち、意欲的に学習できるようにする。そうすることにより、子どもたちが聞きたい、伝えたいという意識をもちコミュニケーションを図ろうとすることができるようにする。

② 共鳴のために

教師は、子どもがどのようなことを伝えたいと思っているのかを見取り、周りの子どもとかかわりやすいようにしておくことや教材教具を準備しておくことにより、伝え合う方策を得やすくする。例えば、グループを意図的に編成し、子どもの配置や教材教具を配置し、子ども同士がやりとりの様子を見合えるようにすることで、周囲の子どもたちとコミュニケーションの仕方を交流することができるようにする。活動が

停滞している子どもには、周りの子どもに目を向けるようことばをかけることにより、友達がうまくコミュニケーションを継続している場面に出合うと考えられる。コミュニケーションが継続している子どもには、うまくいっているところを周りの子どもに見せるようことばをかけ、モデルとして示すことができるようにする。また、子どもの伝えたい内容に関する動作カードや絵カードなどを掲示しておくことにより、自分なりの表現でコミュニケーション活動に取り組むことができるようにする。

5. 実践例

ここでは、ユニット「徳島再発見：どこへ行ったことある？」（第6学年12月）の実践例を紹介する。本ユニットの目標及び学習計画は次頁に示してある。

(1) ユニットについて

本ユニットでは、行ったことのある場所について尋ね合うことを目標とした。行ったことがある場所や行ったことはないが行ってみたい場所などを尋ね合うことで、友達との積極的なコミュニケーションが期待できると考えた。名前だけではどのような場所か分からない場合でも、ジェスチャーや既習の英語の表現をつなぎ合わせるなどして、場所の説明を繰り返すことでコミュニケーションを続けると考えた。

第1次では、自分が行ったことのある場所を日本語で想起した。まず、日本語でふだんの尋ね方を振り返る。次に日本語を使わずに、行ったことのある場所を聞き合う活動へとつなげた。

第2次では、友達の行ったことのある場所を聞き取る活動をした。聞き取る場面では、話し手が伝えたいことが分からず、コミュニケーションが停滞すると考えた。そこで表現の仕方に気付いたり、新しい英語表現を知ったり、表現のよさを認めたり、賞賛したりして、伝え合うよさを実感しながら体験的に活動を進めた。

第3次では、自分の行ったことのある場所を尋ね合う活動をした。尋ね合う中で、相手の行ったことのある場所が分からなかったときに、どのような場所かを、既習事項やジェスチャーなどを使って伝えようとしたり、行ったことのある場所についての情報を共有したりしてやりとりを楽しんだ。

(2) 研究内容について

① 自分の「知」を創り出す子どもを育てるために、どのように支援すればよいか

日本語と英語の会話例を掲示物に用意し、尋ね合おうとする環境を整え、表現に慣れ親しみ、コミュニケーションを図ることができるようにした。また、英語表現だけでなくジェスチャーなどの表現も使ってコミュニケーションを図ろうとしている子どもの姿をモデルとして示すように教師がことばがけすることにより、戸惑いや恥ずかしさを拭い去ることができるようにした。

ことばかけや発問により、友達の表現に目を向け、うまくいっているコミュニケーションに出合うことができるようにした。一緒にジェスチャーをしたり、新しい英語表現と一緒に練習したりすることにより、表現に戸惑い、何もできなくなっている子どもが、グループで表現を考えられるようにした。

単元	徳島再発見 どこに行ったことがある？
単元の目標	(1) 積極的に友達の伝えたいことを聞き取ったり、自分の伝えたいことを紹介したりしようとする。 (2) 行ったことがある場所を聞く表現に慣れ親しむ。 (3) どうにかして通じようとする体験を通して、伝え合おうとすることが大切であることに気付くようにする。

学習活動 (時間)	子どもの意識の流れ は教師の働きかけ	支援 (O11 O12)	培いたい資質・能力
(事前) 日常の会話を取り上げ、行ったことのある場所に興味をもつ。	<p>〇〇へ行ったことがある？</p> <p>〇〇は行ったことがあるよ。 □□などところだね</p> <p>〇〇？行ったことない。 □□などところ。</p> <p>〇〇？行ったことない。</p>	<p>◀ 〇身近な話題を取り上げることで、行ったことのある場所に興味をもつことができるようにする。</p>	<p>● 行ったことのある場所に興味をもつ。</p>
1 行ったことのある場所を想起し、英語で行ったことのある場所の聞き方を知る。 (1時間)	<p>徳島で、行ったことある場所ってどこ？</p> <p>T1: □□□, ☆☆☆☆☆, ◆◆◆◆, ▼▼▼, ……</p> <p>私は、〇〇, ◇◇◇, ●●●, … 私は、〇〇, ●●●, △△△, …</p> <p>行ったことある場所を思い出してみよう。</p> <p>行ったことあるかどうかきいてみたくない？</p> <p>行ったことある場所を聞きあってみよう。</p> <p>ふだん、どういふふうに関わかな → 英語で言うよ…</p> <p>A: 徳島でどこに行ったことがある？ B: 徳島駅 (に) 行ったことあるよ。 A: 私も！ / あるある。 A: 私はないよ / えへどこ。</p> <p>A: Where have you been? B: Tokushima station. A: (ジェスチャーで反応しよう) A: (ジェスチャーで反応しよう)</p>	<p>◀ 〇〇行ったことのある場所を尋ねたり答えたりすることにより、身近な話題で体験的に英語表現に慣れるようにし、積極的に表現することを楽しめるようにする。</p> <p>◀ 〇身近な話題を設定することや簡素化した英語表現を示すことにより、日本語と同じ感覚で英語を使ってやりとりをできるようにする。</p>	<p>● 英語表現の面白さに気付いたり、日本語と英語の共通点や相違点に気付いたりする。</p>
2 行ったことある場所の聞き方や反応の仕方に慣れる。 (1時間) (2) 行ったことある場所について英語で聞きあい、行ったことあるかどうか反応することを楽しむ。	<p>行ったことある場所を聞きあって、反応しよう。</p> <p>A: Where have you been? B: □□□. A: (ジェスチャーで反応) A/B: Thank you.</p> <p>A: Where have you been? B: □□□. A: (ジェスチャーで反応) A/B: Thank you.</p> <p>もうちょっと話したら、もっと楽しいかも…。</p> <p>もうちょっと聞いたら、もっと楽しいかも…。</p>	<p>◀ 〇〇教師が行ったことのある場所を聞き合い、やりとりをすることができるようになることにより、モデルを示し、子どもが活動の内容を理解できるようにするとともに、意欲付けする。</p>	<p>● 行ったことのある場所を聞き合う英語表現に慣れ親しむ。</p> <p>● 積極的に行ったことのある場所を紹介したり、友達の発表を聞き取ったりしようとする。</p>
3 自分の行ったことのある場所を聞き合う。 (2時間) *本時 2/2 (3) 行ったことあるお店を聞き合う。 (4) 行ったことある観光地を聞き合う。	<p>行ったことある場所を聞き合う。</p> <p>A/B: Hi. A: Where have you been? B: □□□. A: Oh! (ジェスチャーで反応) B: ☆☆☆☆. … A/B: Thank you.</p> <p>A/B: Hi. A: Where have you been? B: □□□. A: ? (ジェスチャーで反応) B: It's big, blue. Go shopping… A: ○○○. B: LKOLKO. A: △△△△△. B: △△△△△. A/B: Thank you.</p> <p>〇〇さんたちの伝え方はとても楽しそうだよ。</p> <p>ジェスチャーを使うのが、面白かったよ。</p> <p>このやり方がいいこう。 自分のやり方のためそう。</p> <p>友達と活動して印象に残ったことは、… 〇〇さんの～な伝え方がよかった。 参考にしたいと思った友達の活動のよいところは、… こんなやり方も面白いね。 もっとやってみよう。 場所は分からなかったけど、伝えるのが楽しかったよ。 やり取りするのが楽しかったよ。</p>	<p>◀ 〇〇コミュニケーションを継続しようと表現や反応を試行錯誤している子どもを意図的に取り上げ、クラス全体に広げることにより、コミュニケーションにチャレンジしようとする意欲をもつことができるようにする。</p> <p>◀ 〇〇グループを意図的に編成し、尋ね合いに取り組みさせることで、共鳴が生まれるようにする。</p> <p>◀ 〇〇伝え合おうとしている子どもを賞賛したり、面白いねと声かけしたりすることにより、活動が停滞している子どもも方策に気付くことができるようになる。</p> <p>◀ 〇〇ワークシートに、友達や自分の活動を振り返る視点を示すことにより、変容に気付くことができるようになる。</p>	<p>● 行ったことのある場所について積極的に交流しようとする。</p> <p>● 行ったことのある場所について、まとまった話を聞き、概要が分かる。</p>

② 心をつなぐ学びのために、どのように支援すればよいか

目的意識に満たされた空間づくりのためには、子どもが聞きたい、伝えたいという活動ができるような課題を設定することにより、友達とのやり取りに意欲をもってチャレンジできるようにした。コミュニケーションへの意欲を高めることができるように、単元を通しためあてを設定した。生活の場である徳島県で行ったことがある場所を聞き合うことで、今まで知らなかった場所と出合ったり、さらに新しい情報を知ったりすることで再発見することを目標に設定した。

認め合う人間関係づくりのために、伝え合いを続けるおもしろさやよさを感じられる場を設定することにより、友達とのやり取りに意欲をもってコミュニケーションに何度も挑戦できるようにした。活動のよさをほめたり、認め合ったりできるようことばがけをした。

共鳴のために、教師が子ども同士の伝え合いたいことを把握し、活動しやすいグループを編成した。また、伝え合いをしている子どもを取り上げ効果的に紹介した。そうすることで、コミュニケーションを継続しようと試行錯誤しやり取りを続けようとする姿を互いに見合い、それぞれのよさを共感することができるようにした。教室には、既習の表現や新たな英語表現を提示することで、それらも組み合わせながら、試行錯誤し、コミュニケーションの楽しさに気付くことができるようにした。聞き手には分からない場合でも、ジェスチャーなどの表現も合わせて試しながら、コミュニケーションを図ろうとすることにつながっていくと考えた。

子ども同士が伝え合いたいことを把握し、活動しやすいグループを編成したり、よい伝え合いをしている子どもを取り上げ効果的に紹介したりすることで、コミュニケーションを継続しようと試行錯誤し、やり取りを続けようとする姿を互いに見合うようにした。やり取りする姿を互いに見合う場をつくることによって、それぞれの伝え合いのよさに共感し、活動が停滞しているときのモデルとしても働くようにした。

このように支援することで、共鳴を促し、子どもが自分の「知」を創り出せるようにした。さらに、共鳴を繰り返すことにより、新たなコミュニケーションの方策に気付き、積極的なコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながると考えた。

(3) 授業の実際と考察 (第3次 第2時) は教師の支援)

【本時の目標】

行ったことのある徳島の観光地を伝えたり、友達の行ったことのある観光地を尋ねたりしようとする。

〔学習活動1〕 前時の学習を振り返り、本時のめあてを確認する。

コミュニケーションのおもしろさや気持ちよさを共有できる場を設定し、相手と伝え合っている活動を賞賛することにより、積極的にコミュニケーションを図ろうとする子どもの姿が見られるよう、手だてを講じた。

前時まで用いていた表現を使ってモデルを示すことにより、ジェスチャーや英語表現を使って伝え合うことについて活動の手順をつかむことができるようにし

前時に使用した短冊を取り上げることで、学習を想起できるようにし、本時のめあてにつなげた。子どもたちは、前時の活動で用いた表現を想起したり、観光地について、友達と交流したいという意欲を高めたりしていた。

前時まで用いていた表現を使ってモデルを示すことにより、ジェスチャーや簡単な英語を使って反応したり、聞き合ったりすることについて活動の内容をつかむことができるようにした。

そこで、めあての共有化が図られた。

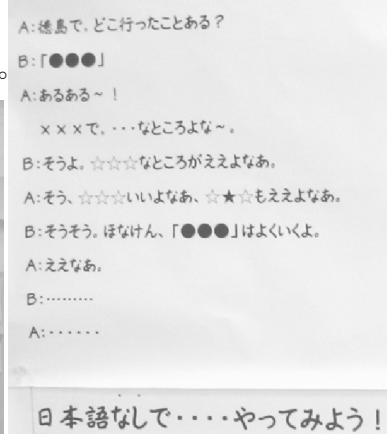
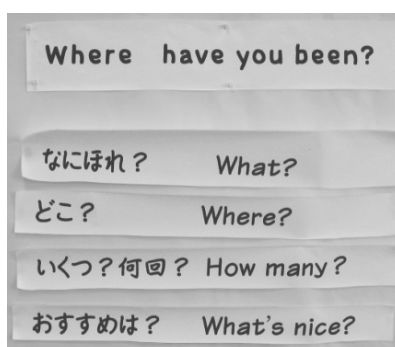
〔学習活動2〕 行ったことのある場所を尋ね合う表現やその方法に慣れる。

本時使用する表現を用いて、ペアになって観光地を尋ね合った。これらにより、学習活動3の内容が子どもたちに示された。

コミュニケーションのヒントになる掲示物を用意することにより、子どもが見ながら活動できるようにした。

＜英語やジェスチャーでやってみよう。＞

本時使用する表現を掲示し、表現に慣れるようにした。



〔学習活動3〕 自分の行ったことのある場所を尋ね合う。

コミュニケーションを続けようとしている子どもを意図的に取り上げ、全体に広げるとともに、そのよさを認めることばがけをした。コミュニケーションのヒントになる掲示物を用意することにより、子どもが見ながら活動できるようにした。

自分のいったことのある観光地

(例)

Hi, I' m ○○.

Where have you been?

Yes, .../No,

Where?

What' s nice?

...



・何と言っているかわからないところがあるよ。困ったな。
・行ったことある。こんなところがいいよ。



他のことばで言い換える，ジェスチャーなどの方略を使う

※「Where have you been?」の表現について

文法的には，中学校第三学年で扱われる。しかし，子どもたちにとって，「have」は既習の表現であり，「been」は，音声としてなじみやすいと考え，扱った。

積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿が見られた。

友達の表現を見たり聞いたりして，表現を得ようとする姿や，どうにかして伝えようとしている姿，自分なりの表現を使って，コミュニケーションをしている姿が見られた。

〔学習活動4〕 本時の学習をふり返り，気付いたことを書く。

次のような観点を提示する。

「友達と活動して気付いたことは…」「参考にしたいと思ったことは…」等，活動のよさを具体的に賞賛した。

提示された観点をもとにして，本時の学習を振り返った。行ったことのある観光地について積極的に尋ね合ったことの記述が見られた。

6. 成果と課題

(1) 自分の「知」を創り出す子どもを育てるために，どのように支援すればよいか

行ったことのある場所という話題について，子どもたちは伝えたいことや尋ねたいことをもっていた。しかしながら，コミュニケーションの目的を持たせることができなかった。コミュニケーションのおもしろさや気持ちよさを共有できるように共通の目的意識をもたせる単元の構成が必要であった。子どもが目的をもってコミュニケーションをし，コミュニケーションの結果，新しいもの（情報）が創り出される共通の目的を設定することで，自分の「知」を作り出す子どもの姿が見られたと考える。例えば，行ったことのある場所を伝えたり尋ねたりする活動を通して情報収集し，単元

の終末には学級でのおすすめランキングをつくるなどのめあてをもたせることも有効な支援であると考えられる。

教師により、伝え方や尋ね方のモデルを示した。コミュニケーション活動のヒントとして、子どもたちの活動につながっていたと考える。しかし、T1とT2だけの提示がほとんどであった。モデル提示で、子どもたちとT1、子どもとT2といったように、段階的に子どもを巻き込んでいくことが必要であった。

学習の振り返りの仕方、振り返りカードの記述の方法にも改善が必要であると思われる。

(2) 心をつなぐ学びのために、どのように支援すればよいか

① 認め合う人間関係と目的意識に満たされた空間づくりのために

尋ねたり、伝えたりする活動のモデルは示したが、子どもたちにコミュニケーション活動のルールを示すことができなかつたために、目的意識に満たされた空間に至らなかつた。コミュニケーションのルールをしっかりと提示する必要があつたと考える。

既習の英語の表現などの掲示が、積極的に尋ね合う手がかりになつていた。さらに絵カードや動作カードを用意することにより、コミュニケーションへの手がかりになることが考えられる。

伝え方や尋ね方のモデルの提示を進める中で、子どもたちとT1、子どもとT2といったように、子どもを巻き込んでいくことが必要であつた。本時の活動をともに行う友達としての意識をもつことができるようにすることで、認め合う人間関係や目的意識に満たされた空間づくりへの支援ともなつたと考えられる。

② 共鳴のために

コミュニケーションの積極性と性別との2点で各グループが均等になるよう構成した。しかし、このことが活動の活性化に対する効果は少なかつた。コミュニケーションの内容やコミュニケーションを互いに見合う子どもの数を活動しやすいようグループに編成することが必要ではないかと考える。

あるグループの積極的なコミュニケーション活動をクラス全体へ広げようと、活動を再現するようことばをかけたが、うまく広げることができなかつた。これは、問い方に問題があつたと思われる。「もう一度やってみて。」と問うのではなく、内容について「どのような話題で盛り上がっているの。」と問うことにより、楽しくコミュニケーションが続けられている場面をクラス全体へと広げられていたと考えられる。また、コミュニケーションがうまくいっているグループに意識を向けることができるようにするための手だても必要であつた。

参考文献

- 兼重昇・直山木綿子編著(2008)『小学校新学習指導要領の展開外国語活動編』東京：明治図書。
- 文部科学省(2008)『小学校外国語活動研修ガイドブック』東京：旺文社。
- ラボ教育センター編(2011)『佐藤学 内田伸子 大津由紀雄 が語る言葉の学び、英語の学び』東京：ラボ教育センター。